

◆ 2つのヴァイオリンのためのソナタ第5番 ホ短調 作品3の5

ジャン＝マリー・ルクレール（1697～1764）はフランスで活躍したヴァイオリン奏者兼ダンス教師である。これは当時のフランス宮廷に仕えるダンス教師として一般的なことだった。貴族のたしなみであるダンスを習得するにあたって、録音技術のない時代には、ダンス教師のほかに伴奏音楽の生演奏も必要となる。その両方を兼ねるのが、舞曲のリズムを奏でながらステップを指導してくれる、ヴァイオリン奏者兼ダンス教師というわけである。のちにルクレールはヴァイオリン奏者としての名声をより確立し、当時パリで創立されたばかりのコンセール・スピリチュエル（一般市民が鑑賞できる公開コンサート）で演奏するなどし、自作曲を多く発表した。第1楽章〈アレグロ〉、第2楽章〈ガヴォット〉、第3楽章〈プレスト〉からなる本作もそのうちの一つである。

◆ 無伴奏ヴァイオリン独奏のためのパルティータ第2番〈シャコンヌ〉より

無伴奏独奏作品のなかでも金字塔と名高い、ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685～1750）の《6つのソナタとパルティータ》のうち、中間地点に存在するのが〈シャコンヌ〉である。3拍子の舞曲をベースとした変奏曲の一種で、8小節の主題と30の変奏からなる。ジャズ音楽の演奏形式同様と考えてよい。ここで主題となるのは「レ・ド・シ・ラ」の四度下降音型、いわゆる「ラメント・バス」（＝悲しみを表す音型）で宗教的な性格も備えているのだが、もともとのシャコンヌは非常に世俗的な踊りだった。「楽聖」「大バッハ」とも称されるバッハだが、実は破天荒で型破りな性格なのである。若いころには喧嘩沙汰で刃物を抜いているし、当時の教会では不文律だった女人禁制は意に介さず、妻にも子供にもメロメロなビッグ・ダディ、しかし信仰心は誰よりも篤かった。世俗があるからこそ神があるのだ、と信じていたのであろう。その精神は作品にも反映されており、その一端をここにみることができる。本日は、〈シャコンヌ〉の第1部（抜粋）の前に、バッハが参考とした可能性が指摘されている、ヨハン・パウル・フォン・ヴェストホフ（1656～1705）の《無伴奏組曲》より二短調の〈アルマンド〉があわせて演奏される。

◆ 《2つのエレジー》より〈エレジー 第1番〉・〈タランテラ〉

ジョヴァンニ・ボッテジーニ（1821～1889）が活躍した19世紀は、パガニーニやヨーゼフ・ヨアヒムといった名手が音楽界においてヴァイオリンの華型的な地位を確立し、その楽器の技巧や音色を前面におしだした作品が多く作曲された時代だった。「ピアノのパガニーニになる！」ことを夢みてその通りになったのがフランツ・リスト（1811～1886）であり、ボッテジーニは、いわばコントラバスのそれである。つまり、「コントラバスのパガニーニ」と称された。この巨大な低音楽器は、過去には通奏低音の補強など、いわゆる伴奏楽器と認識されていた。ボッテジーニは幼少期には才能を認められたヴァイオリン奏者でもあった。その経験が、彼をただコントラバスの名手に終わらせず、協奏曲や室内楽のソロ楽器を務めうらということを示すに至らしめたのかもしれない。作品にあらわれるコントラバスの魅力もバラエティゆたかである。〈エレジー〉は「ここまで美しい音色も出るのか」と思わせるロングトーンが聴きどころ。いっぽう〈タランテラ〉は、原曲にヴァイオリン版があるのではないかと疑いたくなってしまうほど。軽やかなパッセージを繰り出す超絶技巧が、耳だけでなく目でも楽しませてくれる。

◆ ロマンス 作品11

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）といえば《交響曲 第9番 「新世界より」》、《チェロ協奏曲》、作曲者が得意としたヴィオラが活躍する「アメリカ」《弦楽四重奏曲》から〈ユモレスク〉といった小品まで、「チェコ国民楽派代表」の名に恥じないスラヴ的叙情をたたえた作品から黒人霊歌を取り入れた作品まで、幅広い人気作品を世に送りだし、知られている。

しかし意外にも、初演時に演奏者から酷評されてしまった作品も複数ある。例えば《ヴァイオリン協奏曲 イ短調》は、当時ヨーロッパの作曲家にとって憧れの存在だったヴァイオリンの巨匠、ヨアヒムに献呈したものの黙殺されてしまった作品だ。ヨアヒムの初演で喝采を浴び、即時「名曲認定」されたヨハネス・ブラームス（1833～1897）の協奏曲とは対照的である。

ヴァイオリンとオーケストラのための《ロマンス》（1879）もそうした作品から生まれた。原型は、これもまた初演者になる予定だった奏者から黙殺された《弦楽四重奏 第5番》の緩徐楽章で、いわばアップサイクル作品である。しかし、カルテットからオーケストラにまで伴奏を拡大して聴かせる価値のある、美しさを備えたメロディであることは間違いない。

## ◆C. サン＝サーンス／序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28

“Sarasate plays at the St. James’s Hall this afternoon. [...] I observe that there is a good deal of German music on the programme, which is rather more to my taste than Italian or French. It is introspective, and I want to introspect.”  
(Doyle, *The Red-headed League*)

コナン・ドイルの生んだ名探偵シャーロック・ホームズは『赤毛連盟』（1891）の中でこの事件が起こったところ、つまり1890年の秋（諸説あるがいずれも数年の誤差）にヴァイオリンの名手、パブロ・サラサーテの演奏をロンドンで聴いている。内省的な音楽好きのホームズは、このコンサートのプログラムにドイツ音楽が多く組まれていることを喜び（英グラナダ版のドラマではバッハの無伴奏パルティータ第3番の〈プレリュード〉が採用されていた）「イタリアものやフランスものより好きなんだ」と語る。

さて、ここでホームズが引き合いに出した「イタリア・フランスもの」とはなんだったのだろうか。もちろんホームズはフィクティブなキャラクターである。したがって、ホームズが聴いたということは、作者のドイルが聴いた、にほかならない。「イタリアもの」は、パガニーニの技巧的な作品群や、当時流行していたオペラ・アリアの編曲作品が妥当な線だろう。では、「フランスもの」だが、**カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）**が『序奏とロンド・カプリチオーソ』をサラサーテのために作曲し、彼が本作を初演したのは1867年春……。もしかしたら！？ 該当作品は他にももちろん多数あることではあるが、ドイルが本作をサラサーテの演奏で聴き、ホームズの性格描写に小道具として使えるだろうか？ などと考えた可能性があると思うと、ヴァイオリンの名曲として愛奏され続けてきたこの作品に、新たなときめきを感じずにはいられないのである。

## ◆《調和の靈感》より〈第10番 4つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 ロ短調〉RV. 580

バッハはライブツィヒ時代、この作品を《4台のチェンバロのための協奏曲 イ短調》BWV. 1065に編曲している。1730年ごろのバッハが手がけた器楽曲は、自作品あるいは他人の作品の編曲作品がほとんどである。多忙ゆえに新たな作品を作曲する時間がとれなかったこともあろうが、バッハは編曲によって先人の作品を学ぶことを好む人だった。つまり**アントニオ・ヴィヴァルディ（1678～1741）**の本作は、バッハの器楽曲にインスピレーションをもたらした作品なのだ。

形式的には、これより前の時代にアルカンジェロ・コレッリ（1653～1713）が確立していた合奏協奏曲（コンチェルト・グロッソ）によるところが大きい。（本来ならば）四人が務めるヴァイオリン独奏とヴィオラ奏者にそれぞれリピエノと呼ばれる奏者群がひかえていることが古典以降の協奏曲とは大きく異なる。チェロにも独奏が用意され、通奏低音をなぞるに終わらないのが特徴的だ。第1楽章〈アレグロ〉、第2楽章〈ラルゴーラルゲット〉、第3楽章〈アレグロ〉の三楽章（急緩急）からなる構成は、同じ曲集《調和の靈感》のなかでも「四季」として特によく知られるヴァイオリン協奏曲群と同様で、ヴィヴァルディの特徴である。

## ◆弦楽セレナーデ 作品48 より 第2楽章〈ワルツ〉・第4楽章〈フィナーレ〉

ベートーヴェンの「運命」「田園」、モーツァルトの「モツレク」、……。愛称は名曲のバロメーターともいえる。**ピョートル・チャイコフスキー（1840～1893）**の作品で挙げるならば、ヴァイオリンまたはピアノ協奏曲「チャイコン」か。そして1880年に作曲した《弦楽セレナーデ》も同様、日本では「弦セレ」の愛称で親しまれている。いずみ会メンバーの多くがかつて履修していた大坂音楽大学の弦楽アンサンブルクラスでも、頻繁に課題曲として取り上げられていた。桜が咲くころ、「今年の弦アンなに？」「弦セレ」という会話が交わされたものだ。こんにちでも同様であろう。

本日抜粋演奏する第2楽章〈ワルツ〉の美しさは、チャイコフスキーの魅力のひとつ。そして第4楽章〈フィナーレ〉には、ロシア民謡のメロディがふんだんに引用される。チャイコフスキーというと、ロシアの作曲家のなかでは古典的なスタイルによる印象がある。しかし19世紀後半のロシア都市部では、インテリゲンチヤたちがトルストイだ！ 人間の生活だ！ とさわざたて、民謡や民話といったフォークロアがもてはやされはじめていたところだ。また当時のロシアでは、アカデミックな作曲家の仕事ではない、とみなされていたバレエ音楽を手がけたのもチャイコフスキーが先駆者である。「弦セレ」の数年前に世に出た《白鳥の湖》は、音楽ファンからもバレエファンからも酷評された。あまりに早すぎたのである。しかし、イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）ら次世代の作曲家たちには、大きな感銘を与えた。インフルエンサーとしてのチャイコフスキーにもご注目いただきたい。